

主 文

本件各上告を棄却する。

理 由

被告人A本人の上告趣意は、事実誤認、単なる法令違反および量刑不当の主張であつて、刑訴法四〇五条の上告理由に当たらない。

同被告人の弁護人倉本芳彦の上告趣意中判例違反をいう点は、原判示にそわない事実を前提とするものであるから、適法な上告理由とならず、その余は、事実誤認、単なる法令違反および量刑不当の主張であつて、同四〇五条の上告理由に当たらない。

同被告人の弁護人高橋英吉の上告趣意中違憲をいう点は、原審の証拠の信憑性に関する判断を非難するものであつて、その実質は、単なる法令違反の主張であり、その余は、事実誤認および単なる法令違反の主張であつて、いずれも同四〇五条の上告理由に当たらない。

同被告人の弁護人本田熊一の上告趣意は、事実誤認および量刑不当の主張であつて、同四〇五条の上告理由に当たらない。

被告人Bの弁護人市原庄八の上告趣意第一は、違憲をいう点もあるけれども、その実質は、事実誤認および単なる法令違反の主張であり、同第二は、量刑不当の主張であつて、いずれも同四〇五条の上告理由に当たらない。

被告人Cの弁護人近藤勝の上告趣意第一点は、原判決が、被告人を暴力団員またはこれに準ずる者であるとして、量刑において一般人より不利益な処遇をしたことは、憲法一四条に違反するといふのである。しかしながら、およそ、量刑にあたつて、犯人の性格、経歴、環境あるいは犯行の社会的背景などを各犯人ごとに審査して、それぞれ異なる処遇をすることが、憲法一四条に違反するものでないことは、当裁判所の判例（昭和二三年（れ）第四三五号同年一〇月六日大法廷判決、刑集二卷一一号一二七五頁）の趣旨とするところであるから、所論は、理由がない。同第

二点は、量刑不当の主張であつて、刑訴法四〇五条の上告理由に当たらない。

被告人Dの弁護人中栄敬太郎の上告趣意は、各関係者の上告趣意を引用するというものであつて、上告趣意書自体に何らその趣意内容を示していないから、適法な上告趣意といえない（昭和二五年（あ）第一二二〇号同年一〇月一二日第一小法廷決定、刑集四卷一〇号二〇八四頁参照）。

被告人Eの弁護人熊野一良の上告趣意は、事実誤認、単なる法令違反および量刑不当の主張であつて、同四〇五条の上告理由に当たらない（なお、所論中控訴趣意を引用する部分が、適法な上告趣意といえないことは、前記のとおりである）。

被告人F本人の上告趣意は、原判決を攻撃する趣旨とは認められないから、適法な上告理由とならない。

同被告人の弁護人倉本芳彦の上告趣意は、事実誤認および量刑不当の主張であつて、同四〇五条の上告理由に当たらない。

また、記録を調べても、同四一條を適用すべきものとは認められない。

よつて、同四〇八条により、裁判官全員一致の意見で、主文のとおり判決する。

昭和四二年三月一四日

最高裁判所第三小法廷

裁判長裁判官	田	中	二	郎
裁判官	柏	原	語	六
裁判官	下	村	三	郎
裁判官	松	本	正	雄